

## 聖書的思想から見たランケ史学の基本命題

小 川 丙 午 郎\*

### Fundamental Idea of Leopold von Ranke in his History from Biblical Point of View

Heigoro ODA

(1975年9月30日受理)

#### はじめ

ドイツの歴史家、ベルリン大学教授として史料の批判的記述につとめ、近代史学の方角を定めた。諸国家民族間の相関性を強調し世界史の概念確立につとめたが、彼の「あらゆる時代は神に直接す」の言はその神秘性を物語り、歴史的世界の動的構造的発展をとらえていない。

#### 世界史辞典

昭和26年3月27日東京大学文化指導会

上の項は Leopold von Ranke (1795—1886) の解説である。この項においてランケは近代史学への業績を評価されている。一方この項でランケの限界が露呈されている。すべての人に限界がある。ランケもその例外ではない。しかしランケの限界は“あらゆる時代は神に直接す”の言によって定められるのであろうか。字数の制限を受けるのは辞書の解説である。従って上の解説から執筆担当者の知識のすべては計量されない。他面筆者はランケ史学に関しては素人にすぎない。筆者が本文を認めながら意図するものは上の解説に対する反論ではなく、むしろ解説者が“神秘性”として不問に付しておくと思われる。“すべての時代は神に直接す”の命題の意味するところを探究することにある。

#### (1)

すでに掲げた“すべての時代は神に直接す”はランケ史学の基本命題とされ、その原文は Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott. であり、その出典は Über die Epochen der neueren Geschichte (近世史の諸時代について) である。従って Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott. の真義が追求される前に、先ずこの書の由来と内容のあらすじとを説明しなければならぬ。

この書はランケが1854年にバヴァリア国王マキシミリアン二世の要請によって19回にわたって行なった講演を王が要約記録させこれに眼を通して、後筆を加えて Alfred Dove が<sup>1)</sup> 刊行の運びをしたものであり、その分量からすれば小冊子の部類に属すると言っても差支ないであろう。しかしこの小冊子程度の書がランケの著述の中の地位は決して無視することが出来ない。人はランケを近代史学の祖と言ひ、近代史学とは世界史学であるとされるほどである。では世界史とは何か。これについてランケ自身は、あたかも名工が作品自作においてそのイデーを語るように、歴史<sup>2)</sup> 叙述そのものにおいてこり本質を示唆していると人は言う。

このような著述の中でランケの史学理論が述べられかつその立場が明らかにされている

\* 史学研究室

のは *Über die Epochen der neueren Geschichte* であるとは Dove が本書の序文で紹介しているところである。マキシミリアン二世の前で行なわれた19回の講演はいわばランケの史眼に映じた世界史像が圧縮され、ローマを起点として近世ヨーロッパ世界に展開して行く構図である。ランケはこの構図のままにしておくにはその学究心があまりに強かった。

彼がこの構図を拡大し充実して念願した世界史の執筆に着手したのは晩年のこと。それは佛作つて魂を入れずとはあべこべに魂を作って佛の体をなすに至らなかった。

*Über die Epochen der neueren Geschichte* についてのあらまは以上のものであるが、これにさらに一つ付言しなければならない。

この書の開巻において著者が前置して上るのはヘーゲルの諸学派のいわゆる歴史における *Fortschritt* (進歩) の否定である。彼はこのために細々とした進歩に関する概念規定の操作を避け史実を以てその反証を試みている。F・f とは夏目漱石の文学論にあらわれた文学形体の一般方式であり F<sup>3)</sup> とは主要概念であり、(f) とはその形成素材である。Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott. それはこの開巻の中で語られこれは F となり f 全巻のは役割をしているのではなかろうか。ドイツ語の Jede と alle. と英語の each と all. 国語のおのおのすべて、その語義が同じでないことは、言うまでもない。それをも含め論述過程の誤解を防ぐための筆者が以下上の原文を次のように拙訳することを許していただきたい。

おのおのの時代は神に直結する。

## (2)

この書が書かれてから一世紀は過ぎた。ランケの史学が修正を要することは改めて言うまでもない。そしてその表現にも異様な調子を帯び打ど響かないものを感じ入るのは日本だけではなかろう。Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott. もこのようなものの一つであろう。

明治の旧憲法下にあった日本人は天皇に関する発言をする時、その表現が不敬に当たらないように細心の注意をした。この時代天皇に対し敬語を用いることは歴史家たる資格の障りとなつたであろうか。この平明な道理はしかし、“おのおのの時代は神に直結する”と発言したランケには適用されないであろうか。19世紀のヨーロッパは世界と同義でありヨーロッパ史すなわち世界史であった。ランケの史学はこのような現実に応答している。

*Über die Epochen der neueren Geschichte* の中でランケがヨーロッパを語る時、これに対比されるのはアジアである。彼においてはアジアがヨーロッパと区別されるだけでなく、それと差別されているのではなかろうか。では彼がヨーロッパとアジアとの間に区別また差別を設ける規準と原理にしているのは何か。それは国土や国勢ではない。それは Staat<sup>4)</sup> (国家) と Religion (宗教) と文化 (Kultur) の三つが相互に関連し滲透し合うそれぞれの歴史そのものである。断るまでもなく、ヨーロッパ史とはイギリス、フランス、ドイツなど西欧諸国の歴史ではなく、これらを包みかつ越えた European Unity (ヨーロッパ共同体) のそれである。

上記の意味におけるヨーロッパの19世紀はランケにあつても gegenwartigekultur Synthese<sup>5)</sup> (現在時点の文化総合) であった。19世紀のヨーロッパは他面 Christendom (キリスト教国) の形体を失っていなかった。中世のヨーロッパ人<sup>6)</sup> と Catholic とは同意義であったように、この世紀のヨーロッパ精神と Protestantism とは類語であった。このことからランケが史家である前に、また同時に、ヨーロッパ人であったとは容易に言い切られるのではなかろうか。さらにこれに絡み彼がキリスト教徒であることも後に述べるように明らかである。

アジア宗教が Volksreligion(民族宗教)であるのに対し、キリスト教は Weltreligion(世界宗教)である。それゆえに Gott の名に含まれるものは普遍妥当、永遠全能などである。かきこでは、神の名が人々に訴えたのは宗教的心情の分野だけに留ったであろうか。それが学問的真理を伝える時・伝達効果を減じたであろうか。そうであったとは思われない。

このような神の名を含んだ表現が見出されるのはランケの場合だけではない。世界史を同じテーマとしながらその扱い方においてランケがその学説から分離したドイツの Idealismus(観念論)の大成者 Hegel(1770-1831)がその著 Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte を結ぶのは下のようである。

Nur <sup>7)</sup> die Einsicht kann den Geist mit der Weltgeschichte und der Wirklichkeit versöhnen, dass was geschen ist und alle Tage geschieht, nicht nur von Gott kommt und nicht ohne Gott, sondern das Werk Gottes selbst ist.

過去に起ったこと、また日々起っていることは神なしにはあり得ないどころかむしろ本質的に神の業そのものだという洞察のみが、精神を世界史および現実界と宥和させることができるのである。 武市 健人訳

人間ランケ自身はその自伝によって語られている。殊に彼の信仰をかいまみさせるにはこの書が最良であるとされている。彼はザクセン選挙侯領チューリンゲンの小邑 Wiehe(ヴィーエ)に生れた。チューリンゲンとかザクセンの地方の名がルターとそれに因む宗教改革を想起させる。ランケの生家もまたルター派の流れを汲み父祖たちは代々牧師として献身して来た。自伝外のことに属するが、Jaroslav <sup>8)</sup> Perikan によればルター派が後世の哲学形成に遺したものの一つは perioridization(歴史的時代区別)であった。ランケの中に、地方 Protestantism <sup>9)</sup> の影響を認めているのは Collingwood である。

自伝に帰えれば、彼はライプチヒの神学校に学んだ。そこで彼の関心がひかれたのは教義<sup>10)</sup>ではなく聖書であり、とりわけ旧約聖書であった。彼は学生生活を通じて自然を楽しんだ。がこれは研究しなかった。神学は彼に無味乾燥であった。彼はしかしこの中から神<sup>11)</sup>と世界とを選んで思索の主題とした。ランケの自伝にあらわれた彼のキリスト者としての姿の粗描は上のおりである。ランケの自伝には確かにキリスト者としての姿が描かれている。にもかかわらず、これには彼がキリスト者となるまでの回心過程が省かれている。彼がこの書で神の名をあげてもキリストのそれには触れない。Augustinus(354-430)の“告白”や Bunyan <sup>12)</sup>(1628-88)の“思籠あふるる”などの宗教文学者を読んだ人々は画竜点睛の感を覚えるのは無理からぬところである。

ランケ自伝は回心記ではない。それは彼の神学から歴史学への転向の告白録である。ある神学者は宗教改革についてランケに対談を申し入れた。彼はこの時申し入れに応諾する条件とし史家としての立場の諒承を求めたと言われる。Historian <sup>13)</sup> first. 彼は公人としてこの立場で生涯を貫いた。一面彼は私人としては Christian second として、信仰告白には教義の真髓を最大公約数に要約したのではなからうか。思うに彼がキリストの<sup>14)</sup>名を語らなかったのはこのような layman(平信徒)としての自己限定の結果であったらう。

### (3)

重ねて Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott.(おのおのの時代は神に直結者)について。これは屢々繰返したようにランケ史学の出発点であると同時に、彼自身の信仰の自己主張でもある。前置に従い本文の意味の根柢となるものを把握するためには、ランケにとっては自明の生活感情または精神生活の原理であった Gott について一応の説明が試みら

れなければならない。聖書を通読する時、神の存在の理由が問われり、その本質が訊かれている箇所は殆どない。聖書にあらわれる神は具体的に行為し自らを啓示する。すなわち旧約聖書とは神が選民イスラエルの歴史において、またそれを通して働いた神の業を記し、新約聖書とはイエスにおいて、また彼を通して啓示された神の救いを証した書である。神の属性としての付加語は正義、愛、全能、などをまざままである。その呼称も一つではない。こうした呼び名のうち、旧約の神観を反映するものとしてアブラ<sup>15)</sup>ハムの神、イサクの神ヤコブの神と新約の神観を表現するものとしてイエス・キリストの父<sup>16)</sup>なる神の二つをあげておく。キリスト教が「Geschichtliche<sup>17)</sup> Religion（歴史的宗教）と言われるのは神のこのような呼称からでもある。

では神の行為とは何であるか。しばらく新約聖書はおき、旧約聖書の記すところは神の天地創造である。その次第を語るのは開巻の創世記の第一章である。

始めに神が天地を創造された。地は混沌としていた、暗黒が原始の海の表面にあり、神の霊風が大水の表面に吹きまあっていた。まず神が「光あれよ」と言われると光が出来た。神は光を見てよしとされた。神は光と暗黒との混合を分け、神はその光をその暗黒を夜と呼ばれた。かくて夕さり又朝があった。以上が最初の日である。そこで神が「大水の間に一つの大空が出来、大水と大水の間を分けてよと言われるとそのようになった。神不<sup>18)</sup>大空其造り大空の下の大水と大空の上で大水とを分けられた。神はその大空を天と呼ばれた。かくて夕あり又朝があった。以上が第二日である。 中略

神がその造られた総てのものを御覧になると見よ非常によかった。かくて夕あり、又朝があった。以上が第六日である。かくて天と地とその万象が出来上った。神はその創作の業を七日目に完了し七日目に総ての創作の業を休まれた。神は第七日の日を祝し、それを聖しとされた。

関根正雄訳旧約聖書創世記 1. 1—2. 1

創世記は出エジプト記レビ記民数記略申命記ともユダヤ教の Torah（律法）に加えられ、その訳名は世界の成立と意味するギリシア言 *Γενεσις* に由来している。これらの五書はユダヤにおい場所と時代を異した J. E.<sup>18)</sup> D. P と呼ばれる四つの資料の中から構成され、今日見られる形体をなしたのは紀元前 6 世紀の終わり、その編集がエルサレムで行なわれたと思われる。

五書の編集者と推定される Ezra がこの仕事に懸ったのはペルシア王 Cyrus (539-531) によりユダヤ人の捕囚を解放した時、このころギリシアでは Thales によって始られた宇宙の構成の論議が交わされた“自然哲学”の時代が終わりに近いていた。なお上に引用したのは本書の序曲。これに続くものは人類の発生とアブラハムを祖とする選民イスラエルの族長父祖たちの物語である。このような創世記の序曲に至る上記の引用箇所<sup>19)</sup>に眼を移そう。

ここは神が天地を創造しそれを完成するまでの七日間の記事である。序に中略されたところは第三日第四日第五日と第六日の前半である。この記事にはユダヤの素朴な monotheism<sup>19)</sup> の神教が示唆され、また旧約学者の研究の結果によれば神々の闘争を経て Chaos（混沌）から調和（Cos-mos）に至る古代パピロン Cosmogony<sup>20)</sup> が一神教の信仰と豊富な想像力を持った記者によって上のような文学表現となったのである。これは P 記者の想像から生まれた Bild（形象）である。これには「神はよしとされた。」と「かくて夕あり又朝があった」の二つのリズムが創造六日のおのおのに繰返されている。この形象からわたくしたちは Sinn（意味）を抽出することは許されないであろうか。わたくしたちは既に揚げられた記事から同記者の心意をランケに肖って次のように表現することにしよう。

## Jeder Tag ist unmittelbar zu Gott.

おのおの日は神に直結する。

これまでに一二のところにおいて、神は六日の間に天地を創造したと述べられて来た。この表現によって人は次のように解するならば、それは記者の真意から遙かに遠いと言わねばならない。すなわち、本文によれば神は天地の創造のため六日の日程を定めておいたのである。人は、記事の順序を注意深くたどる時、六日のおのおの日は神の業が着手され、吟味されそして満全と見なされた後定められている。この一事からおのおの日は24時間を区画としてこの日から彼の日へと推移する自然運行の道程ではない。それゆえに天地創造の六日のおのおの日はその長短において均一ではない。しかし記者が夕あり又朝があったとリズムを反覆させているように、これには始と終がある。その長短は数量的に計上されなくて、神が見てよしとされたの韻律のごとく質的に評価され賛美されなければならぬ。“始めに神が天地を創造された”。旧約聖書のこの序曲が人口に膾炙されている結果からでもあろうか、神の創造の行為が天地に限定され勝てはなかるうか。

神は天地を創造するとともに、いな、それにまさる意義において、彼は歴史の創造者である。これを証言する章句は一つや二つではない。それらの中から上を端的に告白したものととして次の一節を紹介する。

また、ひとりのひとからあらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、  
それ<sup>21)</sup>それに時代を区分し国土の境界を定めて下さったのである。こうして人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。

日本聖書協会訳使徒行伝17・26-27

この訳文を原意に近けるため下線の部分を引用するとにしたい。

*Ὅρισας προσεταγμένους καιρούς καὶ τὰς ἡρωθείας τῆς κατοικίας αὐτοῦ,*  
そしてこのところを注解を加味して訳出している Menge のドイツ語を付記しておく。

Er hat für sie bestimmte Zeiten ihres Bestehens und auch die Grenz ihrer Wohnsitze festgesetzt.

これによれば時代と訳された日本語に該当するのは bestimmte Zeiten ihres Bestehen. その存続の定められたもろもろの時代の謂である。

## (4)

筆を Über die Epochen der neueren Geschichte に戻そう。この文の中心テーマとされた“Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott.”の出典が本書であることは先に触れた通りであるが、これは単独な sentence ではなく下のような従属する Clause である。

Ich aber behaupte : jede Epoch unmittelbar zu Gott, and ihr Wert beruht gar nicht auf dem, was aus ihr hervorgeht, sonder in ihrer Existenz selbst, in ihrem eigenen Selbst.

上文の Logos は鈴木成高相原信作訳世界概観に精緻に訳出されている。その pathos の一端は selbst と Selbst との書体の差のうちに窺われるのではなかるうか。

ランケはこれに見られるような Persönlichkeit (人格) の尊厳の原理を“おのおの時”に授影し自己肯定と自己主張とをさせている。

Das Individuum stirbt; es hat ein endliches Dasein; die Menschheit dagegen ein endliches.

そして人はここにランケが Kant<sup>22)</sup> (1724-1804) に由来し影響を見逃すことが出来ないの

であろう。自伝においてランケは Fichte との出会いを語り、Kant には言及していない。がカントのランケへの影響は、彼の実践理性批判の次の文と下記のランケのそれとを比較すれば明らかになるだろう。

Dieses niemals bloss als Mittel, sondern zugleich selbst als Zweck zu gebrauchen.

(この主体は決して単に手段としてのみ用いられるべきでなく同時にそれ自身目的として用いられるようにの命題に)

Eine solche gleichsam mediatisierte Generation würde an und für sich eine Bedeutung nicht haben; sie würde nur insofern etwas bedeuten, als sie die Stufe der nachfolgenden Generation wäre, und würde nicht in unmittelbarem Bezug zum Göttlichen stehen.

(かくのごときいわば媒介化された時代はそれ自身において意味を持つということがないだろう。それはただ後続する時代時代の階段たるかぎ米においてのみ若干の意味を持つだけであり、神的なるものにつながるということはないだろう)とを対比する時、自ずから明らかになるのではなからうか。

ランケもまた時代の自己肯定と自己主張の論理を哲学に求めたのは史学成立への過程において当然のことであろう。

では自己肯定と自己主張、いな自己存在の究極の根源は何であろうか。人はランケにおいて神以外に何が求められるであろう。

Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott. (おのおのの時代は神に直結する)。

以上の命題の真意に近づくために筆者はアウグスティヌスの所謂 Allegorical<sup>23)</sup> interpretation (比喩的解釈)の精神に沿いつつ創世記の天地創造の記事を Jeder Tag ist unmittelbar zu Gott. と転訳して来た。これが Wortspiel (言葉のたわむれ)に終らぬようにと念じつつ、上の文の中における unmittelbar の一語は軽く読み過さられてはならない。聖書を繙く時、仲保者の呼称が見出される。新約聖書においてはこの呼称は神と信徒の間に執成をするイエス・キリストに限られている。そして仲保者の原語 *ωσειτης* (Gal. 3. 19, Heb 8. 6) は Luther (1483-1546) によって *mittler* と訳されている。

聖書の示すところは神と人との間の仲保者はひとりのイエス・キリストである。これを文字通りに信じかつそれをそのように行なったのはプロテスタント。イエス・キリストの外に多くの仲保者を定めたのは Catholic であった。Hierarchie (教階制)のカトリックプロテスタントのにおいては神と人との関係は *Mittelbar* である。カトリックの教階制を否定した *universal priesthood* (万人祭司主義)では神と人との関係は *unmittelbar* である。ランケはこの神と人との宗教関係を神と時代とのそれに類推している。

神と時代とは永遠と歴史との意味であろうか。ランケがもし神に代り *Das Ewige* (永遠なるもの)の名を用いたら *Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott.* の神秘的なヴェールが剥がれたかも知れない。人が永遠と言う時、自ずから時間が対置される永遠と時間とは、どのような関係に立つであろうか。このテーマはまことに大きい。

スイスの神学者 Cescar Cullmann もこの問題を神学の角度から扱い、その著 *Christus<sup>24)</sup> und Zeit* キリストと時において原始キリスト教会の時の観念を明示し、これをヘレニズム的時間の把握様式と峻別している。またフランスの哲学者 Claude Tresmontant はユダヤの時間<sup>25)</sup>把握とギリシアのそれとを対比させながらギリシアにおいては時間は永遠の映像にすぎないと断言している。新約聖書は時間をそれぞれの性格に従い *ἡμερα, ὥρα, καιρός, αἰών, αἰώνες, εἰς τὸν αἰῶνα*, などを語を用いている。新約聖書はギリシア語で書かれているが、この中にあらわれる永遠の言葉には *Εἰς Τόους αἰῶνας τῶν αἰώνων* などに見られ

るように時間また時代に対立する特別な意味がない。なお以上並べた時間を表わす諸語のうちランケの Epoch に該当するものは *αιών* また *αιώνας* である。

クルマンは以上の永遠を時代の連続と見なす新約聖書の表現に次のような創見を示している。

永遠と限られた世の時を無限につらね合せたものであって、これが継起する順序は神みの見渡しうるものである。

ランケが *Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott.* と発言した時、彼は時と永遠に関するギリシア的思考を精算していたのであろうか。

### む す び

17世紀以来ヨーロッパに進歩の思想 (Idea of Progress) が起こり、18世紀には澎湃とした時代思想となった。この進歩の思想はフランスの Abbé de Sint Piere (1658-1743) や B. de Bovier de Fontenelle (1657-1757) また J.J. Rousseau (1712-78) などの代弁者の影響により人間理性の普遍と人類の未来に向う進歩が無条件に信じられるようになった。進歩の思想はフランスからドイツに入り、ここで修正され深化された。進歩の言葉は *Entwicklung* に代り理性はこれに *Geist* (精神) を加えられた。のみならずこれを基礎づけた理論は形而上学的であり神学的であった。こうしてそれまで人類の普遍の根本原理とされた理性は *gottlich* (神的) な性格を付与された。

人間精神の神的なものが人類の歴史の中に展開し彼に内在する神的な理性によって *Menschheit* (人間性) が完成されたまたそうされねばならないとはカントに始まるドイユ観念武を支配する思想であって、J. G. Fichte (1762-1814) は有力な代弁者であり、J. G. von Herder (1744-1803) はこれを歴史哲学的に歴史解釈した。世界の人類の歴史を記述しそれを哲学的に解釈した歴史哲学が整然たる体系として完成されたのは既にその一文を引用したヘーゲルにおいてであった。ヘーゲルとランケとはベルリン大学の同僚であった。ここは進歩主義と歴史主義<sup>26)</sup>との会合点となった。そしてここで哲学と歴史とは相互に分離するに至った。ヘーゲルにランゲルが訣別したのは進歩主義と歴史主義との対立によるものである。それだけであらうか。

上述に関し論が主題を離れ多岐にわたらないため、次の一点に約言することに満足しななければならない。ヘーゲルとランケとはキリスト教徒でありながら、それぞれの神観においては文字通り対蹠的であった。ヘーゲ名が神の歴史のうちに働く法則に、弁証法的思考過程を投影し、人間理性に神的性格を付する限り、神は世界に内在し人は *Vergötterung* (神格化) される *Pantheismus* (汎神論) への傾向は免れない。ランケがヘーゲルの著書から引用し次のように語っているのは、彼は暗に歴史を超越し人間に被造性を宣言する *Monotheismus* (一神教) の立場を示唆しているのではないだろうか。

*Der Lehre, wonach der Weltgeist die Dinge gleichsam durch Betrug hervorbringt und sich der menschlichen Leidenschaften bedient, um seine Zweck zu erreichen, liegt eine höchst unwürdige Vorstellung von Gott und der Menschheit zu Grunde; sie kann auch konsequent nur zum Pantheismus führen; die Menschheit ist dann werdende Gott, der sich durch einigen geistigen Prozess, der in seiner Natur liegt, selbst gebiert.*

世界精神がいわば詐術<sup>27)</sup>によって事実を生起せしめたり、あるいはその目的実現のために人間の情熱を利用したりするものだとす入学説の根柢には、神および人間をないがしろにするような観念が潜んでいる。かかる学説はまた当然の帰結として汎神論に帰着す

るほかない。その場合には、人間は現成しつつあると神であって、その本性に見わるところの精神過程によって自己みずからを生むことになる。

終わりに、ランケが歴史のすべての分野にわたって進歩の史実を否定したのではない。彼が否定したのは人間そのものの進歩である。上に因み *Über die Epochen der neueren Geschichte* はランケと王との対談の形で結ばれ、王にランケは次の言葉を提している。

In der Sittlichkeit kann ein Fortschritt nicht angenommen werden, denn die Sittlichkeit ist zu sehr mit der Persönlichkeit verbunden.

道徳においては進歩なるものを仮定することは不可能である。なぜなら道徳はあまりに密接に人格と結びついているから。

これにはその強さと深さにおいては別として、宗教改革時代 Luther Calvin (1509-64) にとって必死の解決をせまられた Original sin (原罪) に由来する人間観とが継承されたこの影響が示唆されているのではないだろうか。さらに彼が上において Personlichkeit (人権) という表現をした時、彼の中にこれに対置されていたのは何であったろう。それは natur ではなく Göttlichkeit ではなかったろうか。

#### 注

1. 刊行年代1888年ランケ村岡哲著. P. 64.
2. ランケと世界史学鈴木成高著 P. 15.
3. 夏目漱石著. 文学論. 漱石全集第九卷. P. 21.
4. Weltgeschichtliche Betrachtungen Jacob Burckhardt Gesamte Werke. P. 21.
5. Der Historismus und seine Problem von Ernst Troeltsch, Scientia Aalen. P. 338.
6. A Political and Cultural History of Modern Europe Voll. by Carlton F. H Hayes. P. 3-4.
7. Vorlesung über die Philosophie der Weltgeschichte. Felix Meiner Verlag Band L. P. 938.
8. ルターからキエルクゴールまで, J.ベリカン著, 高尾利数訳. P. 112-113.
9. The Idea of History by R.G. Collingwood. P. 122.
10. ランケ自伝. 林健太郎訳. P. 30.
11. Ibid. P. 19.
12. 清教徒の庶民文学者. Grace Abounding はその回心記.
13. Christianity and History. Essays by E. Hurris Harbison. P. 3.
14. History and Historians in the Nineteenth Century. Y. P. Gooch. P. 99.
15. EX 3. 6, 16 Mk. 12. 26.
16. Eph. 1.3 2 Cor. 1.3.
17. Dogmen-geschichte by Seeberg. P. 2.
18. The Old Testament and Modern Study by H. H Rowley. P. 81.
- J, E, D, P はそれぞれ Jahwist, Elhkist, D は Deuteronomist, Priestly の畧号.
19. Ancient Judaism by Max Weber. P. 224.
20. Ibid.
21. 藤井武著 “聖書より見たる日本” の構想にはこれがヒントとなっている.
22. Kritik der praktischen Vernunft. Krönes. P. 274.
23. グラント著聖書解釈の歴史. 茂泉昭男・倉松功訳. P. 93.
24. 日本訳キリスト時. 前田護郎訳. 本文にはこの書から引用された.
25. ヘブル思想の特質. C.トレモンタン著西村俊昭訳. P. 54.
26. Friedrich Meinecke; Die Entstehung des Historismus. P. 4.
27. Vorlesung über die Philosophie der Weltgeschichte 1. Felix meiner Verlag. P. 79.

## 本論文の典拠とした原典

Leopold von Ranke : Über die Epochen der neueren Geschichte Hessesgegeben von Theodor Schilder und Hermut Berding, 1968.

**Summary**

Jede Epoch ist unmittelbar zu Gott. This is fundamental idea in Ranke an historian. This phrase, however, has been too popular to be inquired into its original meaning. To meet this demand the writer has attempted to make clearer of the above-mentioned phrase by the side-light of the Bible. And he arrived at the following conclusion that Ranke derived his idea from the mythical account of creation of heavens and earth in Genesis.